

“見えざるもの”との“ながいながい戦い”

軒先に連なる「柿の木」「干し柿」、蜜いっぱい美味しい「りんご」を楽しく頬張る参加メンバー。そんな写真を見ながら、2年8カ月を経過した「相馬港周辺を中心にした」復興事業の現状と、被災したみなさん方の今の暮らしぶりの一部分を見て、また直接感じられるツアーに参加出来て大変に感謝しています。

私事になりますが、今年の春先にフリーとなり「岩手県・久慈」から「宮城県・気仙沼」まで、自転車を持参した「一部汽車・バスの旅」で回りました。地震と大津波での被災状況を各地で目の当たりにして、復旧の部分進捗と一方での大きな遅れを感じました。海岸沿いの道路復旧は特に遅れを実感し、気仙沼以降は時間的にも前に進めず、地元の札幌に戻り「震災・津波等」は「知った・見た！」と勝手に思っていました。

「あの黒いカバーで覆われた多くの『塊』が今の福島です」。国道4号線の曲がりくねった道路を宿泊先のホテルへ向かい走るバスのなかでの福島校友会のメンバーの説明。ホテルでの「クリスタル線量計を首下げして遊んでいる子供」「公園や学校等に設置された線量計」等のお話で、福島に残された「今」をハッキリ認識しました。

福島を、カタカナの「フクシマ」にして孤立させたり、「風化」させてはならない。その地元で暮らす福島校友会の皆さんが強調していた「福島に来てください。福島の商品を利用してください。」の言葉を改めて自分のものとして取り込み、国や行政には「福島が、東北そして日本に自然に存在する誇れるもの」であることが、具体的な行動を通じて早期に国民の共通意識となるような取り組みを切望する。「今のままではダメだ！」

追加： 最後に、福島校友会の皆さんに感謝し、事務局・参加メンバーの皆さんとの短い時間でしたが、楽しい交流ができて感謝しています。

感想； 初雪の降った「札幌」から伺い、紅葉には驚かなかったが、暖かい天気、狭い道幅、軒先の「柿の木と干し柿」等同じ日本国内での気候や風土の違いを改めて感じました。安心して暮らせるように「後始末できない原発は、廃炉しかない！」